『夜の寝覚』の新出和歌から

――男君の夢と物語の構造――

米田明美

はじめに

平安後期成立の『夜の寝覚』（「夜半の寝覚」「寝覚物語」とも）は、藤原定家書写『更級日記』の奥書により、菅原孝標の女[1]の作と伝える。五巻本または三巻本が現存するが、どれも中間と末尾に相当な欠巻が存する。中間欠巻部に関しては『物語二百番歌合（拾遺百番歌合）』『風葉和歌集』『無名草子』と、中世になって改作された『中村本　夜の寝覚』から、末尾に関してはそれらに加え『寝覚物語絵巻詞書』などの限られた資料から、その内容を推定するに留まっていた。ところが近年『夜の寝覚』の末尾欠巻部の古筆切である「伝慈円筆寝覚物語切」三葉[2]と、中間末尾両欠巻部の場面を有する「夜寝覚抜書」が相次いで発見発表[3]され、推定の域を出なかった内容が少しずつ明らかにされつつある。

その中で特に「夜寝覚抜書」は、現在大阪青山大学に所蔵されているもので、中間欠巻部から三場面、末尾欠巻部から二場面の、和歌を中心として叙情的印象的な場面が抜書きされ、九首の歌を収めている。そのうちの五首は、今回新たに見出された新出和歌で、「あはれなどかげをならべて山のはにすみはつまじき契なりけん」の歌は、現存部でその一部が繰り返し語られていた歌であり、主要な場で詠じられていたと言えよう[4]。この「夜寝覚抜書」は、『夜の寝覚』の文章から直接抜書きしたものである[5]ことから、その資料的価値は極めて高い。

それら新出和歌に関し、以前いささか卑考[6]で論じたが、十分言い尽くせなかった箇所がある。今回その歌を中心に、その歌の意味する内容、そしてそれに関わる『夜の寝覚』の構造にまで論じてみたい。

一、新出和歌と中間欠巻部広沢での再会

今回問題とする歌は、「夜寝覚抜書」の次の歌である[7]。（『資料集成』資料四の二）

いまはいとゞおもひいでじをぬるたまのなにとみえつるゆめにあるらむ　A

ぬるたまのゆめのうちなる身ともがなすべてこの世にあらじと思を　B

このAB歌に至るまでの、物語の経緯をまとめたい。一般的に用いられる五巻本（小学館『新編日本古典文学全集』松平文庫蔵本、引用も同）に則ると、巻一巻頭で、源氏の太政大臣の二人の姫君が紹介される。その妹君（中の君）十三歳の八月十五夜に、姫の夢に天人が下り、琵琶の秘曲を授ける。翌年の同夜も再び天人が夢に現れ、残りの秘曲を教え「あはれ、あたら、人のいたくもの思ひ、心を乱したまふべき宿世のおはするかな」と姫の宿世を嘆き消える。中の君は、その天人の予言通り、種々の苦悩を背負うことになる。

中の君は、姉の婚約者であった中納言と物忌みで訪れた九条の家で出逢い、一夜の契りの結果懐妊してしまう。中納言の方も忘れることのできない女性を捜し求め、遂に妻の妹であることをつきとめる。巻二では、二人の間に生まれた姫君を中納言は密かに引き取る。

その後錯簡部、つまり中間欠巻部が存する。他の資料からその内容を類推する[8]に、中の君は、三人の娘を残し妻に先立たれた左大将と結婚することになる（『無名草子』『中村本　夜の寝覚』など）。大納言となった男君は、中の君の婚約に衝撃を受け、手引きを介し、広沢で中の君と逢う。ABの歌はこの折詠まれたものであろう。改作本である『中村本　夜の寝覚』にある、

わが心ながらも心うく、むねうちつぶれて見給へば、「ぬる玉の」などあるも思あはせられて、あはれなりける契、おぼししられ給へば、たゞいま見る心ちして涙をち給ふ。

あまりあるまじくおぼしたりし御文を、めとゞめ給ふなめり、とみたてまつりて「さばかりの給はせしに、ねんじてきこえさせ給へ」といふも、はづかしけれど、やはらすべりいで、かきたまふに、大しやうおわして、「いづち」などたづねたてまつり給へば、かきさしてやりて、やがてそこにふし給ぬ。

（『資料集成』資料五の五一）

の箇所と関係する歌であることは、ほぼ間違いないと考えられる[9]。『中村本　夜の寝覚』は、改作した文章や歌に、原作の歌の一部を用いることが多いからである。傍線部の「ぬる玉の」は、このAの歌の一部であろう。改作本巻二のこの場面の少し前では、男君が広沢を訪れ、少将の手引きで中の君と一夜を過ごし、その暁方のまどろみの中、男君が夢を見る箇所がある。その夢は、

いとうるはしくびんづらゆひたるわらはの、こがねのしきしにつゝめる物をとりいだして、「これは、御もとなるたまのたぐひなり」とてたてまつりたるを、ひきあけて見給へば、しきの一のまきの、たまのぢくしたるなりけり。めでたきふみのさまかな、と見給ふに、このをんな君、「これこそ、ほうらいの山のたまのえだよ。一えだは御もとにあり。これは、まろがにせん」とてとり給ふを、わがもとなるにならべてこそもため、と思てとらんとすれば、「しばし、なをこれは、をきてみん。つゐにはたてまつらん」とてふところにひきいれ給ふ。（『資料集成』資料五の三二）

というものであったが、ここでは男君はその夢の意味を知り得ていない。男君は、「『まことにうたがひなき夢のさまなれば、いとひやり給ふまじき夢をこそ見つれ』とて、おきいづべきかたもおぼえ給はねば」（『資料集成』資料五の三二）と悩むのである。その後男君は、

せめて、なぐさめがたき御心に、夢ときをめして、たまのえだの夢をかたらせたまへば、「あめのしたにならびなく、かしこく、すぐれ給へるおのこゞぞ、いできおはしまさん。たゞし、それをよそにや、き、給はんずらん。さりとも、つゐには、御てにえたてまつらせ給てん」と申すに、わが御心にもおぼしあわせられし御夢なれば、…（『資料集成』資料五の三九）

と夢解きにより夢の意味を知る。その意は、二人の間には男の子が誕生するが、その子はしばらく他人の子として育てられるが、最後には我が元に戻るであろうというものであった[10]。

ABの歌は、この夢を見た直後の歌と考えられるのだが、これはあくまで改作本である『中村本　夜の寝覚』に従った内容である。この男君の夢に関する資料は、改作本にしかなく正しく原作にあったとは断定できないのである。

二、歌語「ぬるたま」

「夜寝覚抜書」にあるABの歌には、共通して「ぬるたまの」の語が詠み込まれている。この語を含む平安鎌倉時代の歌は以下の通りである。（傍線筆者）

『伊勢集[11]』で、

からもりが道たづねわびて、臥したるをとこに
やへとむる道は夢にもまどふらしぬるたまにさへあふとみえねば　①

『相模集[12]』

ぬるたまのゆめのうちにあはせしよきことをゆめゆめかみよちがへざらなむ　②

俊成歌『長秋詠草　下[13]』

陀羅尼品
乃至夢中、亦復莫悩
うつつにはさらにもいわずぬる玉の夢の中にもはなれやはする　③

家隆歌『壬二集』恋部[14]

恋歌あまたよみ侍りしとき

いかにせんただ思ひねにぬる玉の夢の枕にさむる面かげ　④

雅経歌『明日香井和歌集』（院百首　建保四年[15]）

恋

歎きわびぬる玉のをのよるよるは思ひもたえぬ夢もはかなし　⑤

猶この歌は、『新勅撰和歌集』（巻十五・恋歌五）にも採られ、詞書は「題知らず」である。

定家歌『拾遺愚草』（無動寺法印早率露胆百首　文治五年[16]）

ぬる玉の夢はうつつにまさりけりこの世にさむる枕かはらで　⑥

他に和歌ではないが、『左近権中将藤原宗通朝臣歌合[17]』の序に

あるところに、ことのおこりは、この春はをとこ女ほうしわらはわかずあそぶべし、なかにもやよひはことに心をやりおもひをのぶべし、人のぬるたまになむ、あきらかにみえたりけると、よにいひわたりて、たかきところもいやしきところも、くわはせといふ事をぞしける、それを女房たちききて、うたあわせこそ人の心をとどむることなれとて、にょうぼうは左右わかれて、…⑦

とあり「人のぬるたま」が記されている。また康和二年（一一〇〇年）に開催された『源宰相中将家和歌合』の恋歌に対する隆源の陳状[18]に、

後朝歌に、うみなどよみおきはべらぬことは、あらいそのなみうちまかせたることにや、あしがきのみぢかき集にもあまた侍れども、あをつづら来るくるまうすべきことならぬうへに、証歌はふるき歌合のうたをなんいだすべきと侍は、天徳歌合などのみえらることかとたずね申さまほしうぞ、夜の恋の歌に、そだをかへすとよめるは、いざ、いかがあるべきからん、たちまちに申さでも侍なん、ただ白妙のかへせば、ぬるたまのゆめにいもをなんみるといふことあまたあれば、よみて侍るなる、…⑧

この「ぬるたまの」は、近年の辞書・注釈書[19]では「寝魂」の字を当て、「夢の別称」の意とする。それらの出典は①②や⑥、『八雲御抄』となっている。管見であるが、今のところ見出せる初出は『倭歌作式』と考えられ、「若詠髪時　むばたまと云　……　若詠夜時　ぬば玉のと云　若詠夢時　ぬるたまのと云」と八十八例の枕詞の一例として示している[20]。だが『万葉集』には「ぬるたま」の例はなく「寝魂」の字も出てこない。また今のところ「ぬるたま」に「寝魂」の字が当てられているのは、近世の注釈書[21]までしか行き着いていない。辞書・注釈書類の「寝魂」は、おそらく平安末鎌倉期の③④⑤歌の「ぬるたま」に、「寝る」の意が掛けられているところから来たのであろう[22]。また「玉」の字は、古代から「魂」に通じることから「寝魂」となったのではないだろうか。

「むばたま」「ぬばたま」に関しては、古く『天徳四年三月三十日内裏歌合』の十六番の判詞で判者の藤原実頼が、右歌中務の歌（むばたまのよるのゆめだにまさしくばわがおもふことにみせばや）に対し、

…右歌、「むば玉」と書けり。夜といふことは、ぬば玉とぞいふかし。うば玉は同じやうなれど、書きあやまちたるなめれば、そのよし奏すれば、「あやまちあらむには、いかでか」と仰せ言あれば、以左為勝。

と評され、この「むばたま」「ぬばたま」の使い分けを示している。この判詞は、永く和歌の規範となり、『綺語抄』『和歌童蒙抄』『和歌色葉集』『八雲御抄[23]』などに引かれたことは有名である。

『万葉集』では八十例詠まれた「ぬばたま」は、『古今和歌集』になると激減し、勅撰集八代集では「む(う)ばたま」が二十例となっている。現在のところ「うばたま」「むばたま」は、「ぬばたま」の変化したものというのが通説になっている。では「ぬるたま」はどうなのか。建久九年に後鳥羽院に上覧された『和歌色葉集』には、

むばたまのこの夜なあけそあからびくあさゆふ君をみねばこひしも

喜撰が式云、夜はぬばたま、髪はむばたま、夢はぬるたまといふ也。但、この集にはむばたまの夜ともいひ、又むばたまの夜ともよめり。夜も髪もともに黒ければかよはしていふなるべし。天暦の御歌合に、小野宮清慎公判者にて、むばたまの夜といふはひが事なり、夜をむばたまとこそいへ、むばたまは別物の

名なりとて、まかさせ給へり。喜撰が式のまゝにや。[24]

と、ここでは天徳四年の判詞例に加えて、『倭歌作式（喜撰式）』に記載があるとして「夢はぬるたま」を追加している。「夜・髪・夢」という並び方などを考慮し、また『万葉集』などに用例がないことからして、「ぬるたま」も「ぬばたま」から変化した語なのではないだろうか。

「むばたま」は、古い例としては『古事記』『日本書紀』から見られ、「夜」「黒い御衣」「甲斐の黒駒」などに掛かっている。「万葉集」では八十例見出され、「烏玉」「黒玉」「夜干玉」「野干玉」など表記され、「夜（宵・昨夜も含む）」「黒（黒髪・黒馬も含む）」「夢」が主たる被枕詞であるとされる。[25] おそらくこの三種の被枕詞から後に「むばたまの夜」「ぬ（う）ばたまの黒」「ぬるたまの夢」へと修飾語が限定され、『倭歌作式』や『和歌色葉集』の記載へと繋がっているのではないだろうか。他の多くの枕詞よりも、人々に馴染み多用された枕詞であった所以ではあるまいか。

この中で、『万葉集』中「むばたま」が「夢」に掛かる用例については、岩下武彦氏[26]に詳しい論がある。氏によると「むばたま」が「夢」「夜の夢」などに掛かる用例十二例を挙げ、その中の五例は「互いに相手に対する思いが募ると相手の夢に現れるという事が信じられていた様子が伺える。それは、一定の祭式的な手続きによって得られた夢には特別な意義があり、公的に信ずべきものと考えた古代人に特有の夢についての態度に連なるものと考えられる。」と論じられている。勿論現実よりも一段軽いものとして夢を捉えている例もあるものの、「ぬばたまの夢」に相手に対する思いが募り相手の夢に現れるとして、信ずべき夢のようなものがあることは見逃せないと思われる。平安期に入ってからの相模の歌②や、内容から応徳三年（一〇八六）の『若狭守通宗朝臣女子達歌合』の序ではないかとされる『左近権中将藤原宗通朝臣歌合』の序⑦や『源宰相中将家和歌合』の恋歌に対する隆源の陳状⑧にその片鱗を見出せるからである。

②の歌は、詞書はないが前後「夢」を題材にした歌が集められている。その中で「ぬるたまのゆめのうちにあはせしよきことを」と「夢合わせ」つまり見た夢を占ったという内容の歌は、この歌のみである。『相模集』に置かれている②の前後の歌から、おそらく相手が夢に現れた内容であったと思われる。[27] ⑦に関しては、この歌合の開催が「人のぬるたま」によるものであるとなり、「ぬるたま」が夢告の役割を持っているといえよう。⑧は袖を返して寝ると相手が夢に現れるという平安時代の俗信の意を示している。

以上考究するに、『古事記』『日本書紀』『万葉集』などに多く詠じられた枕詞「ぬばたま」から派生した「ぬるたま」は、単に「夢」に掛かるだけでなく、上代の互いに相手に対する思いが募ると相手の夢に現れる「夢」とし、更にその意を夢解きに占わせ真意を知るという「夢告」「夢占い」という意味も暗示させ、使用された時期があったと考えられる。ちょうどそれは平安時代中期頃、女流歌人相模が活躍し『夜の寝覚』が執筆された頃であったろう。

三、男君の夢と物語の構造

『夜の寝覚』の冒頭は、

人の世のさまざまなるを見聞きつもるに、なほ寝覚めの御仲らひばかり、浅からぬ契りながら、よに心づくしなる例は、ありがたくもありけるかな。

そのもとの根ざしを尋ぬれば、そのころ太政大臣ときこゆるは、朱雀院の御はらからの源氏になりたまへりしなむありける。…

と始まり、この女君（中の君）の父親（太政大臣）の出自が語られ、二人の北の方とその子ども達（男二人と女二人）が紹介され、「中にも、中の君の十三ばかりにて、まだいといはけなかるべきほどにて」と中の君の登場となる。そしてその後すぐ中の君の夢に二度天人が現れ、琵琶の秘曲を授ける場面へと続く。つまり「人の世のさまざまなるを見聞きつもるに、なほ寝覚めの御仲らひばかり…」は、中の君の見た夢の実現が中心となって物語が展開するという構造になっていると考えられてきた。[28] 今回明らかになったＡＢの歌から、男君も夢を見たことが原作にも存することが推定された。先行物語において男性が見た夢として、特に本物語に多大な影

響を与えた『源氏物語』では、藤壺と密通した後光源氏が見た夢、光源氏の夢枕に亡くなった藤壺が現れた夢、女三の宮と密通した柏木の見た夢、夕霧の夢中に亡くなった柏木が登場する場面などが描かれている。その中でも特に若紫の巻で語られる光源氏の夢は、

中将の君（光源氏）も、おどろおどろしうさま異なる夢を見たまひて、合はする者を召して問はせたまへば、及びなう思しもかけぬ筋のことを合はせけり。「その中に違ひ目ありて、つつしませたまふべきことなむはべる」と言ふに、…[29]

夢解き（合はする者）を介しその夢の内容が明らかにされ、それは光源氏自らが「違ひ目ありて」須磨明石へと蟄居せねばならなくなるという『源氏物語』の重要なストーリーに結びついている。だがこの若紫の巻の夢では、改作本の『中村本夜の寝覚』の男君の見た夢の記述ような夢の具体的な描写はない。

『夜の寝覚』の場合は、「ぬるたま」の語からすると、女君が男君の夢に現れた内容であったかと思われる。『風葉和歌集』恋四（『資料集成』資料二の四）に、

ねざめのひろさはの准后、心にもあらずおい関白にむかへられて、なげき待けるころ、わか関白のゆめに見え待ける歌

物おもふにあくがれいでゝうきみにはそふたましひもなく〳〵ぞふる

という歌がある。中間欠巻部に属すると考えられているが、改作本には該当する箇所はない。しかしこの「ぬるたま」の語の解釈から、この歌こそ男君の夢中で中の君が詠じた歌ではないだろうか。その後このA・Bの歌へと展開していったのではないか。

この『夜の寝覚』の男君の見た夢が、前述の改作本『中村本　夜の寝覚』と同様の内容であったかどうかまでは分らないが、新出和歌の「ぬるたま」の歌語から、その夢には女君が現れるという内容で、A歌の「なにとみえつるゆめにあるらむ」の意からすると、男君がこの後夢占か夢解きをした可能性はなくはない。「ぬるたま」の語の使用例や『源氏物語』にも夢解きによって二人（光源氏と藤壺）の行く末が明らかにされる内容が含まれていることからすると十分考えられるであろう。そう考えると本物語は、冒頭で語られた中の君の夢を具体化するという手法を用い物語が紡ぎだされているものの、その途に男君の夢の実現も挟み込まれ進んでいく展開になっているのではないだろうか。つまり中の君が見た天人による二つの夢中での予言を物語の大枠にし、その中に男君の見た夢の実現も織り交ぜ、中の君と男君の少なくとも合計三種の夢を含む構造であったのではあるまいか。それが物語の最初から作者の意図するものだったのか、それとも物語を書き進むうちに構想が拡大してそうなっていったのか等興味は尽きない。これから更に注目する必要があろう。

四、まとめ

今回、近年発見発表された大阪青山大学蔵「夜寝覚抜書」の歌の二首の歌から、歌語「ぬるたま」の使用例を分析し、その歌の意味する内容を論じてみた。

『古事記』『日本書紀』『万葉集』などに多く詠じられた枕詞「ぬばたま」から派生した「ぬるたま」は、単に「夢」に掛かるだけでなく、上代の互いに相手に対する思いが募ると相手の夢に現れる「夢」として、使用された時期があったと考えられる。おそらく『夜の寝覚』作中で詠じられた時期もその頃であろう。原作の中間欠巻部には、男君が左大将との結婚が決まった中の君と密かに逢い、その後男君が夢を見る場面が描かれ、『風葉和歌集』の歌・A・Bと詠じられたのであろう。改作本に描く男君の夢内容と全く同じと言えるかどうかまでは分らないが、二人の今後を占う夢であった可能性はあろう。

以上のような場面が原作にもあったとすると、『夜の寝覚』は、物語冒頭で中の君の見た夢の実現が物語の主たる構造であったと考えられてきたが、一方男君の夢もその内容に含まれていたこととなろう。それは作者が「人の世のさまざまなるを見聞きつもるに、なほ寝覚めの御仲らひばかり…」と書き起こした執筆当初から構想にあったのか、それとも書き進める中で物語が展開し拡がっていったのかはこれから更に論を深めていく必要があろう。

注

(1) 藤原定家筆「更級日記」奥書「ひたちのかみすかはらのたかすゑのむすめの日記也　母倫寧朝臣女傳のとの、は、うへのめひ也　よはのねさめみつのはま、つみつからくゆるあさくらなとはこの日記のひとのつくられたるとそ」

(2) 田中登「『夜半の寝覚』末尾欠巻部断簡の出現」『中古文学』第五〇号　平成四年一一月、同「新出の『夜半の寝覚』末尾欠巻部断簡」『汲古』第二九号　平成八年七月、同『古筆切の国文学的研究』平成九年　風間書房。

(3) 伊井春樹「『夜の寝覚』散逸部分の復元――新出資料『夜寝覚抜書』をめぐって――」『國語と國文学』平成一二年八月、田中登「『夜寝覚抜書』の解読法」『国文学』（関西大学国文学会）平成一三年三月、同「『夜半の寝覚』末尾欠巻部の内容――近年出現した資料の位置づけを中心に」『國語と國文学』平成一五年一二月。

(4) 田中登・米田・中葉芳子・澤田和人編『寝覚物語欠巻部資料集成』二〇〇二年三月　風間書房の注、石埜敬子「歌の解釈と位相をめぐって――改作『夜の寝覚』の方法」『講座　平安文学論究　第十八』平成一六年五月　風間書房。

(5) 拙稿「『夜寝覚抜書』の性格」『日本文芸論叢』平成一五年三月　和泉書院、田淵福子「『夜寝覚抜書』の方法」――第二場面と『小夜衣』との関連を中心に――」『中古文学』第七五号　平成一七年五月など。

(6) 拙稿「『夜寝覚抜書』の新出和歌の周辺――中間欠陥部の広沢での逢瀬と別れ――」『古代中世和歌文学の研究（藤岡忠美先生喜寿記念論集）』平成一五年二月　和泉書院。

(7) 『夜寝覚抜書』の引用は、田中登・米田・中葉芳子・澤田和人編『寝覚物語欠巻部資料集成』（二〇〇二年三月　風間書房）に依る。以下、「無名草子」「風葉和歌集」「拾遺百番歌合」「中村本　夜の寝覚」の引用も、これに依る。また各の引用に付す資料〇の〇〇もこの本に依るものである。

(8) 坂倉篤義『夜の寝覚』（昭和三九年五月　岩波日本古典文学大系）、関根慶子・小松登美『増訂　寝覚物語全釈』（昭和四七年九月　学燈社）を参考にした。

(9) 注(4)参照。

(10) 坂本俊子「『夜の寝覚』中間欠巻部の夢とその役割――『史記の一の巻』とその玉の軸」『王朝細流抄』第五号　平成一二年一二月、藤井由起子「中村本『夜寝覚物語』の〈夢〉の論理」『詞林』（大阪大学古代中世文学研究会）第三三号　二〇〇三年四月。

(11) 引用は、平野由起子校注「伊勢集」『平安私家集』（岩波新日本古典文学大系）に依る。

(12) 同、武内はる恵・林マリヤ・吉田ミスズ『相模集全釈』一九九二年一二月　風間書房（私家集全釈叢書）。

(13)(14)(15) 引用は『新編国歌大観』に依る。

(16) 引用は、久保田淳『藤原定家全歌集　上』（一九八六年六月　河出書房新社）に依る。

(17)(18) 引用は『新編国歌大観』に依る。

(19) 『角川古語大辞典　第五巻』（角川書店）では、「寝魂」の字を当て「夢の別称。［八雲・三］に『夢ぬるたまとも云（俊抄）』とある。『やへとむる（＝一本「とづる」）みちは夢にもまどふらしぬるたまにさへあふとみえねば』（伊勢集）『ぬるたまのうちにあはせしよきことをゆめゆめ神よちがへざらなむ』（相模集）」とする。また注(11)は、「ぬるたま、寝る魂。夢。」と注し、高野晴代校注『伊勢集』一九九八年一〇月　明治書院（和歌文学大系18）の注も同じ。注(12)は、「寝る魂　眠っている魂。「魂」は人間の精霊などをさす。『寝る魂の夢はうつつにまさりけり此の世にさむる枕かはらで』（拾遺愚草　四九七）」とする。

(20) 佐佐木信綱編『日本歌学大系　第三巻』昭和三九年五月　風間書房。

(21) 寛政十年に記された『新勅撰和歌抄（祖能抄）』では、⑤の注釈として、「ぬるたまは、寝魂（ネルタマシヒ）也。それを緒にて貫く玉にいひかけたる也。こゝに玉の緒といふはたゝ魂（タマシヒ）のこと也。」としている。

(22) 室町時代の『伊勢物語』の注釈書「伊勢物語奥秘書」に「さざ浪のよるは筵をしける江にたがぬる玉ぞ蛍飛ぶかげ」がある。

(23) 『歌合集』（岩波日本古典文学大系）の注、前述の『天徳四年三月三十日内裏歌合』の十六番の判詞の引用もこれに依る。

(24) 佐佐木信綱編『日本歌学大系　第壱巻』昭和三二年三月　風間書房。

(25) 岩下武彦「人麻呂における枕詞「ぬばたまの」の用法と表記について」『日本文學』（東京女子大学）第七七号　平成四年三月、川島二郎「人麻呂の枕詞『ぬばたまの』について」『天理大学学報』第五七巻　第一号　平成一七年一〇月。

(26) 注(25)参照。

(27) ②の前歌は「あさからむ夢のかぎりはしきたへの床のちりともうちはらはなむ」で、後の歌は「いつくしききみがおもかげあらはれてさだかに告ぐる夢を見せなむ」である。

(28) 野口元大「Ⅱ主題と構造」『夜の寝覚研究』平成二年　笠間書院、永井和子「第一章　寝覚物語　一、寝覚物語の冒頭――中の君と音楽――」『続　寝覚物語の研究』平成二年九月など。

(29) 引用は『源氏物語一』（一九九四年三月　小学館　新編日本古典文学全集）に依る。

From the new appearance 31-syllable Japanese poem of Yoru no Nezame A dream and structure of the story that Otoko-gimi watched

YONEDA Akemi

Abstract : *Yoru no Nezame,* the tales written in the Heian era, misses volumes both at the middle and end of every existent text, and the reconstruction of the contents of those volumes have been attempted by many scholars. Although this work seemed to have been completed, recently new materials for those missing volumes have been discovered and so now we need to reconstruct the contents all over again.

Accordingly, It became clear that a story advanced according to the contents of the dream that Otoko-gimi watched from the meaning of a 31-Syllable Japanese poem discovered newly. It will be necessary to examine the structure of the story in future.